

# 沖打越中世墓

～伊賀市沖字打越～

2010/01/30

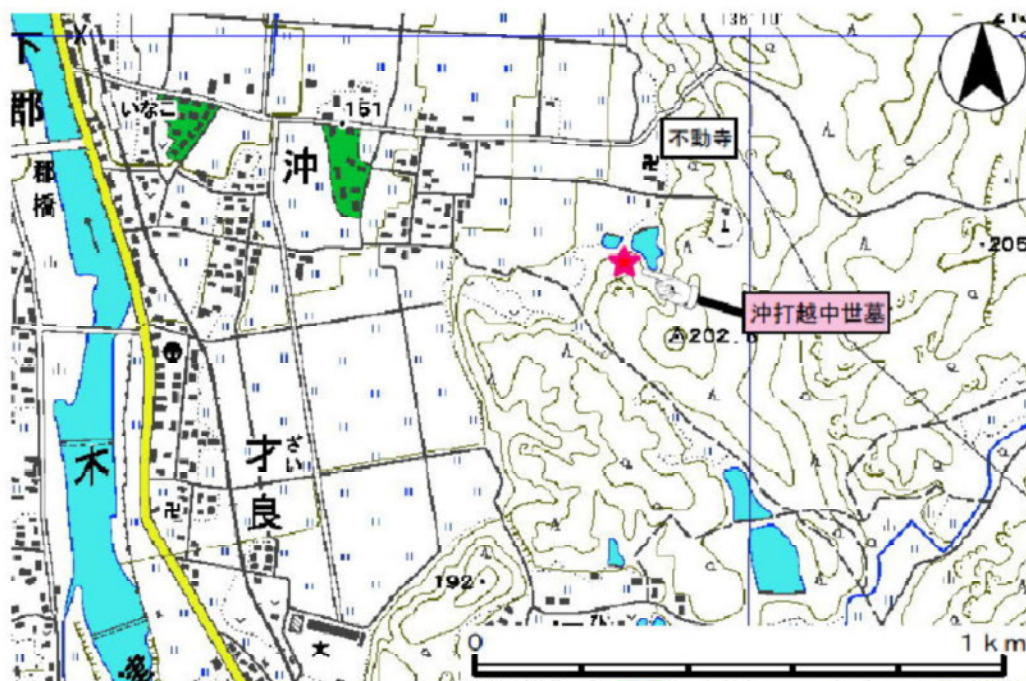
三重県埋蔵文化財センター



調査の状況（奥の建物は不動寺）

沖打越中世墓おきうちこしちゅうせいぼは、伊賀市沖字打越にあります。今から700年ほど前、鎌倉時代後期の遺跡です。所在地は、沖集落の東方、不動寺ふどうじというお寺の南側にある丘陵尾根の上にあります。遺跡の上に立つと、伊賀盆地の南側が一望に見渡せます。

今回の発掘調査は、吉田谷古墳群と同じく農免農道の建設事業に伴って実施しました。



沖打越中世墓の位置（国土地理院『伊勢路』1/25,000より）

## 調査の成果

発掘調査の結果、尾根の頂上部を中心に、13世紀末から14世紀前半頃と考えられるお墓が見つかりました。それでは、見つかった内容を見ていきましょう。

### 【経塚と五輪塔】

尾根の一番高いところで、直径3～5cm程度の円礫が多く見つっています。これは、ひとつひとつの石にお経（教典）を書き、一ヶ所にまとめた「経塚」と考えられます。「経塚」とは、様々な願いを込めて書いたお経を、地中に埋納するという仏教の儀式です。石に書いたお経を「礫石経」といいます。礫石経は江戸時代に最も盛んとなりますが、今でもなお行われている続くスタイルです。

経塚の周囲には、やや大きい礫と五輪塔が散乱していました。おそらく、この礫石経の上を石敷きにし、その上に五輪塔を建てて標識にしたと考えられます。

五輪塔は幅21cm程度の小形のものですが、鎌倉時代末頃の特徴を持っています。この経塚が、沖打越中世墓を象徴するものといえます。

### 【火葬骨埋納土坑と蔵骨器】

経塚の周囲には、火葬された人骨のまとまりがいくつか見つかりました。これらには、陶器の壺に火葬された骨を入れて納めたもの（蔵骨器）と、直径20cm程度の穴を掘って、骨をそのまま入れたもの（火葬骨埋納土坑）とがあります。蔵骨器は、元の位置を保っているものが3基あり、破片となって散乱していたものを含めると6・7基あったと考えられます。火葬骨埋納土坑は7基見つっています。

蔵骨器には、今の愛知県知多半島で焼かれたもののほか、土師器の鍋もありました。

### 【茶毘の跡】

尾根の一番高いところから少し下がった南側の斜面から、焼けた痕跡のある坑が見つかりました。ここからは炭のほか、鉄釘も見つっています。鉄釘は棺桶に使われていたものと考えられるため、この坑は死者を火葬した場所（茶毘の跡）と考えられます。

### まとめ

発掘調査の結果、沖打越中世墓は13世紀末から14世紀前半頃にかけての火葬骨を埋



全景（東から）



経塚と五輪塔



埋納された蔵骨器（S X 9）

納した場であることが分かりました。当時の墓地としては決して大きくはないのですが、1基の五輪塔をシンボルとした経塚があること、それ中心に火葬骨が埋納されていること、付近には茶毘の痕跡も見ついていることなど、鎌倉時代後期頃のお墓の様子をコンパクトに知ることができます。また、火葬骨を埋納する方法にも、蔵骨器を使うものとそうでないものがあり、何か意味のある違いがあるのかも知れません。

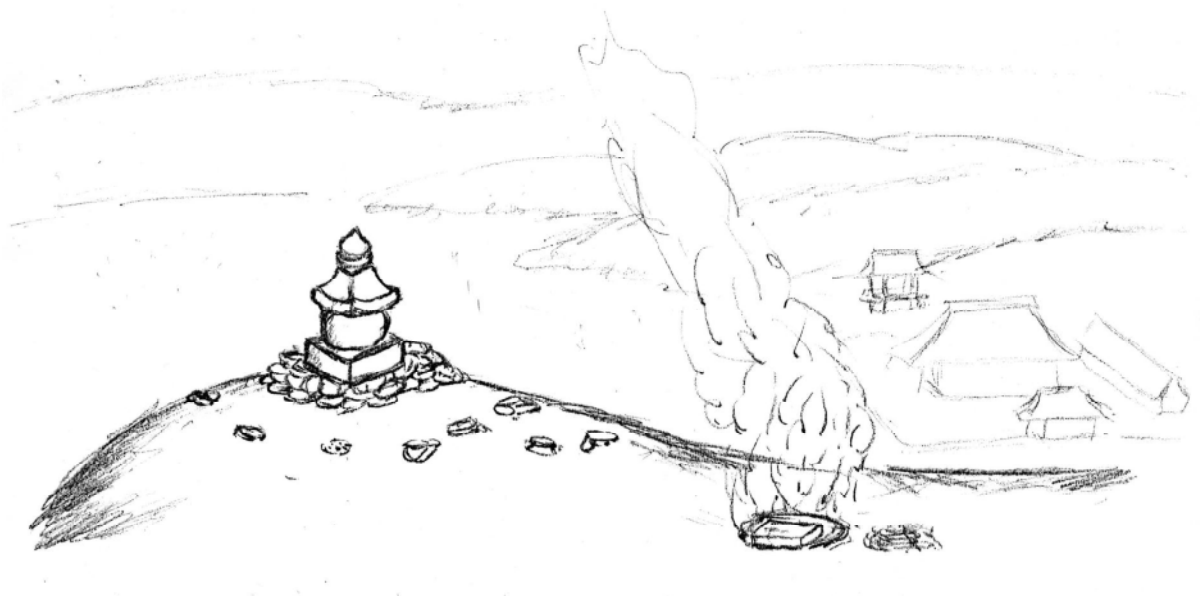
さて、沖打越中世墓の北にある不動寺の宗派は律宗りつしゅうです。南北朝時代末期なんぼくちようの明德2(1391)年に書き改められたといわれる『西大寺末寺帳さいだいしまつじちょう』にも記載されている、由緒ある寺院です。沖打越中世墓は、この寺院に関係した沖集落の有力者が形作った「聖なる場」だったと考えられます。



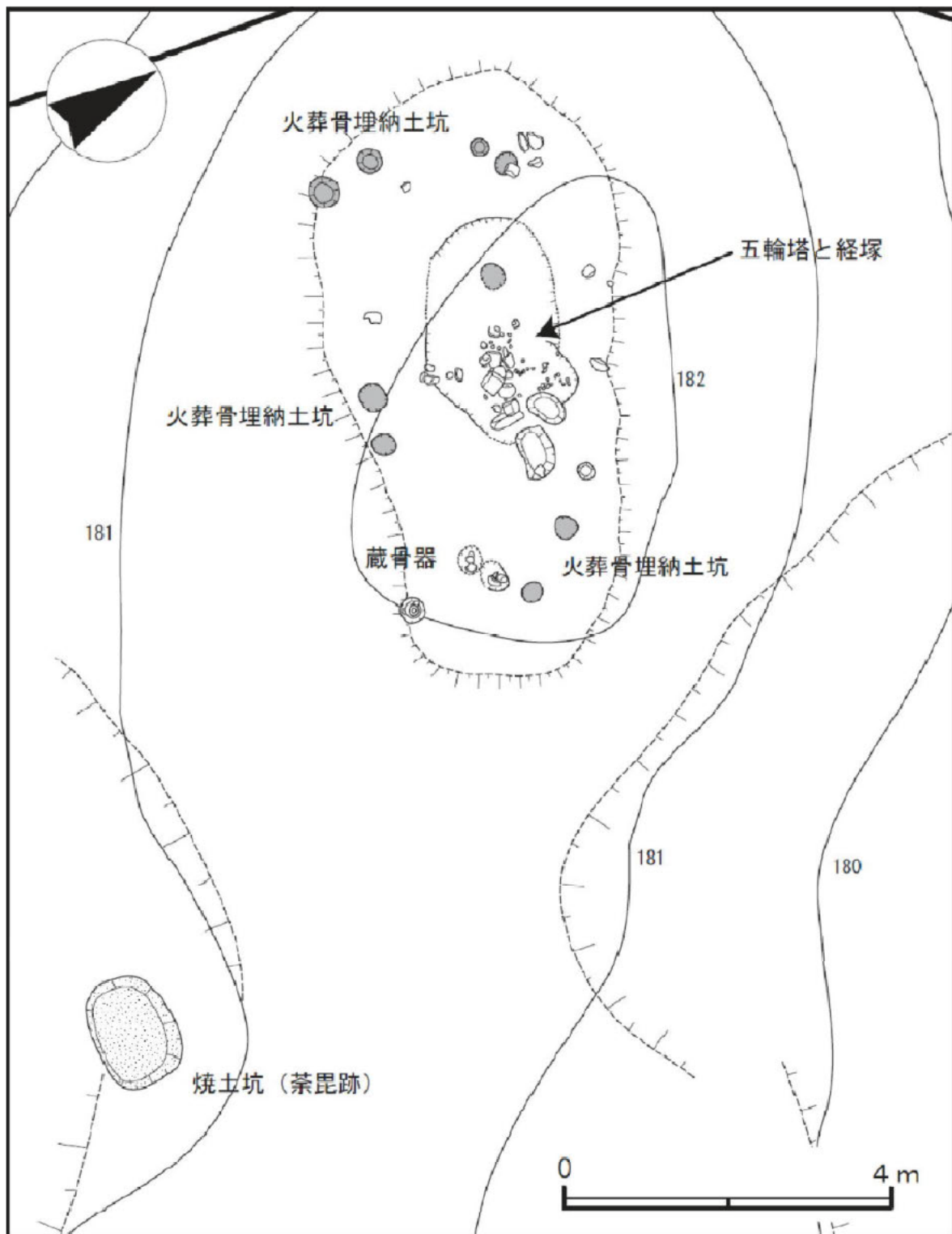
火葬骨埋納土坑 (S X 7)



「茶毘」の場 (左前方に中世墓がある)



沖打越中世墓 イメージ図



沖打越中世墓 主な遺構の配置図

調査遺跡名 沖打越中世墓  
 所在地 三重県伊賀市沖字打越  
 原因事業名 平成 21 年度農免農道事業 (伊賀依那古 2 期地区)  
 調査実施機関 三重県埋蔵文化財センター